

京都文書のこころ

認知症ケア確立への道標

森 俊夫（京都府立洛南病院診療部長）

武地 一（京都大学医学部附属病院 老年内科診療科長）

今回は

【もり・としお】精神科医。1983年鳥取大学医学部卒業。京都大学医学部附属病院精神科を経て、1987年から京都府立洛南病院に勤務し現在に至る。



「つどい当日」と「つどい前夜」

2012年2月12日、粉雪が舞う厳寒の京都。会場となった同志社大学寒梅館へと向かう人の流れは途切れることなく続き、烏丸通りへとあふれる長い人の列が形成されました。この日開催された「京都式認知症ケアを考えるつどい」とは、「京都の認知症医療とケアの現在」をデッサンし、「認知症を生きる彼・彼女から見た地域包括ケア」に言葉を与えることを目的とした試みでした。プレセミナーも含めると7時間におよぶ熱い議論が交わされた「つどい」の最後、京都文書の朗読が始まると会場は不思議な静寂に包まれていきます。そして15分ほどの朗読が終わり、会場を埋め尽くした1,003人の地鳴りのような拍手で「2012京都文書」が採択された場面は、京都の認知症医療とケアに新しい形が与えられていくことを予感させ、認知症の人が排除されない社会を幻視する瞬間になりました。

これから始まる6回の連載は、この「京都式認知症ケアを考えるつどい」とは何だったのか、そして「2012京都文書」とは何かというテーマに沿って、京大病院の武地先生と私とで交代で書き綴っていく半年間の旅になります。狭義の「つどい」とは、2011年11月27日の準備会に始まり2012年2月12日に終わる、京都というローカルなエリアで展開されたわずか2カ月半の疾風怒濤の物語に過ぎません。しかし、一つの行政単位全体を対象にして「認知症を生きる人から見た認知症ケア」に言葉を与えようとした直接民主主義の実験であったという点において、大きな時代の流れと連動し、時空を越えた「普遍性」を獲得する可能性がありました。その瞬間を言葉にしてつかまえようとした「2012京都

文書」とは、一つの始まりであり、未来に向かた「未完の書」としての宿命を帶びます。そういう事情から、武地先生と私の旅は、過去と現在と未来とが錯綜する時間旅行の様相を帶び、あるいは現実と幻想とが交錯する異次元空間を彷徨うものになりそうです。この旅路の行く先というか、この連載が終わったときに私たちがどこにたどり着いているのか、それを楽しみにして書き綴っていきます。「つどい」も「京都文書」も一つの通過点に過ぎませんから、まだ見たことのない地平へと歩を進める緊張感を持って臨みます。よろしくお付き合いください。

◆ つどい前史

つどいの源流の一つは、2007年9月28日の国立京都国際会館、第50回日本病院・地域精神医学会総会の特別プログラムとして一般公開された「認知症セミナー」に遡ります。認知症セミナーには、長崎から太田正博さんと菅崎弘之さん、京都から高見国生さんをお呼びしました。そして、会場には肺癌を患い限られた時間を生きる小澤勲さんの姿がありました。「これまで認知症を病む人が私たちを、そしてこの世界をどう見ているのかにこころを寄せるという視点が欠けていたのであるまいか」とは彼の言葉です。認知症を生きる当事者自らが語り始めたことで認知症ケアの新しい時代が幕を開けようとしている、そのことを明確に刻むことがセミナーの目的でした。それが「2007京都文書」であり、今回の「2012京都文書」の序章になります。その締めくくりの言葉が「認知症の疾病観を変えることから始める」でした。

◆ 認知症の「入り口問題」の発見

二つの流れが生まれます。一つは、職種・職域の垣根を越えて広範な人々が集う「ポストセミナー」であり、認知症セミナーで蒔かれた種子を育む拠点になりました。もう一つは、事例検討を中心とする実践的な認知症ケアのフィールドとなった「宇治市認知症ケアネットワーク」です。二つの流れは、4年の時を経て「入り口問題」の発見にたどり着きます。「2012京都文書」には、「認知症の疾病観を変えるためには、つまり初期の疾患イメージと手当の方法を確立するためには、出会いのポイントを前にずらすことが必要になる。(中略) 医療やケアの侵襲性を最小限にするためには、失う前、壊れる前に彼らと出会う必要がある。そこで浮上してくるのが入り口問題である」と書きました。入り口問題とは、換言すれば社会経済的問題を含んだ「医療やケアからの排除」のことでもあります。ここで初めて方法論が明確になります。認知症の疾病観を変えるためには、まずはこの入り口問題を正確に描き出すことであり、次にその解決に向けた道筋を明らかにすることでした。

連綿と続くこころの系譜があります。こうした問題を机上の空論ではなく本気で解決し、京都に認知症ケアを確立しようとする試み、それが京都式認知症ケアを考えるつどいでした。2010年の「地域包括ケア研究会報告書」を受けて、京都では「京都式地域包括ケア」の構築が始まろうとしていました。残された時間は限られています。

2011年11月27日、同志社大学渓水館で「つどい」準備会が開催されました。同和園の橋本武也さんが事務局の中心を担い、認知症ケアに関与するものが一堂に会する場をつくる突貫作業が始まります。つどい本番まであと2カ月半。 (つづく)

（次回は、武地一医師が執筆します）

8月18日開催 会報・ホームページ編集委員会(上半期)報告

会報の役割を再度考える

今年度の委員全員と担当事務局員、編集協力のクリエイツかもがわの参加で開催しました（参加者名は下記に掲載）。



ホームページ(HP)は10年の夏にリニューアルし、2年を経過しました。支部では「HPで知ったので」との相談が増えています。会報は会員のみが読めますが、HPはインターネットに接続が可能であれば誰で見ることができます。その違いを踏まえ認知症の理解や情報提供、「家族の会」の周知、講演会やつどいの情報などを定期更新しながら、速報性をもって情報提供することを確認しました。

会報の役割議論では、「日常の介護の苦しみや喜びの共鳴ができる、社会の流れを知る」「社会に問題提起する、オピニオン的なもの」「介護の悩み解決に向けての知識や知恵、介護相談」「介護でつらい思いをしている人の救いになるようなもの」「認知症のことすべてがわかる」などの意見が出ました。この考えはどれも重要ですが、会報の精神の根幹は「介護で苦しんでいる人の救いになる」を大事にすることを確認しました。もっと役立つ、こころに寄り添う会報にしていきます。（会報・HP・教育委員長 鎌田松代）出席者：高見国生代表、会報担当理事・鎌田松代、水流涼子、坂口義弘、会報委員・坂田稔、竹中織恵、日田剛、鷺巣典代、クリエイツかもがわ・岡田温実、菅田亮

事務局担当・三木敦子、辻村康代、小野貴志（HP）

書籍の紹介

認知症を 生きる人たちから見た 地域包括ケア

京都式認知症ケアを考えるつどいと
2012京都文書



定価：1,890円（税込）発行：（株）クリエイツかもがわ

「高見代表の一筆啓上」の3月号、4月号で紹介し、今月号から連載がスタートした、「京都式認知症ケアを考えるつどい」とそこで採択された「2012京都文書」が書籍になりました。

京都の認知症医療・ケアの現在と道筋をデッサンし、認知症を生きる彼・彼女から見た地域包括ケアを言語化する試み——「つどい」の全記録と「2012京都文書」の全容を明らかにした一冊です。

お求めは、（株）クリエイツかもがわ（TEL075-661-5741 FAX075-693-6605）または、お近くの書店まで。

会員さん からの お便り

認知症に気づいて2年

福島県・Iさん 72歳 女

お風呂に入らなくなつて、2年。扇風機、テレビ、ラジオ、IHコンロはすぐに消してしまいます。介護者である私から離れないので、どこへでもついて来ます。不安感が強いようです。少し強く言うと暴力がでます。力加減がないので怖いです。夜中に何度も起こされます。よだれが出ます。「何かおかしい、変だ」と繰り返しています。洋服、パジャマの着方も忘れていました。

そんな夫を2年間介護しています。

温かい対応に感謝

埼玉県・Yさん 41歳 女

昨年の秋に埼玉支部の電話相談で温かく対応していただけて大変助けられました。

自分が現実を受け入れることと、日常を保つことに追われてきましたが、もうきちんと認定を受けて、社会のサポートを使わせてもらうことを考えてみようと思いました。

「家族の会」の活動にも参加できたらと思いました。

ショート利用は かわいそう？

兵庫県・Aさん 62歳 女

実母は認知症がすすみ、帰宅願望、昼夜逆転がひどく姉が困っています。母は92歳です。デイケアも行ったり行かなかつたりしています。一日しんどいと言って、昼から起きたりしています。

ショートステイの利用を姉に促しても「母がかわいそう」と言って、行動に移すことはしていません。

つどいで知恵をもらって

高知県・Oさん 68歳 女

会員になって4年が過ぎました。私の心の変化が、混乱をしていたつれあいの変化にもつながりました。悩みを共有してくださる仲間がいることで、ずいぶん助かっています。つどいは時間が足りなくて新しくおいでた方を中心にお話を聞くことになっていますが、なかなかお一人おひとりが満足されてないのではと思っております。

おかげさまで私自身は学ぶことにより皆さんのお知恵を頂きながら、介護しているという気持ちから共に生きているという気持ちになれて、楽しい日々を過ごさせていただいています。

母の認知症が 受け入れられない夫

福岡県・Sさん 61歳 女

「ぼ～れぽ～れ」に連載されていた池田学先生の「認知症」（2011年12月号～2012年3月号）を読みました。認知症について詳しくわかりやすく書かれているので、とても参考になりました。

昨年4月、要介護4となり、急速に身体症状が悪化してきた義母（90歳）は2月からロングショート、3月に精神病院に入院となりました。その病院の認知症デイサービスを利用していた関係上、入院させてもらうことができたのです。アルツハイマーと脳血管性の混合型にパーキンソン症状もあり、在宅が困難となったからです。

その症状を受け入れられない夫はイライラして怒り「入院は失敗だ。症状が悪化した」と悔やむばかり。そんな時、池田先生の本を読ませ、私がよく相談する県の認知症相談に電話することも勧めました。そうすることで、徐々に落ち着きを取り戻し、受け入れていきました。まだ、いろいろあるでしょうがこれからも相談していこうと思います。

認知症が理解されません

佐賀県・Tさん 43歳 男

母が認知症になって長いのですが、市役所がなかなかきちんと調査してくれず、病院、デイサービスもまともな対応をしてくれず、だんだん認知症がひどくなるばかりです。再度、認定を受けて、今、結果待ちですが、このままだと父も私も体力が持ちません。

利用者の声からショートの食費を一食毎に改善（京都市）

京都府・Tさん 62歳 男

京都市は市内125カ所、すべての介護施設ショートステイの食費を10月までに、一食毎に改善します。これは利用者と家族の声によるものです。今年1月に実施したアンケートでは、52%が一日毎の徴収をして

いました。各施設には正協力の依頼文書を送り、京都市議会では意見書を決議し、国にも要請しました。

05年10月の、厚労省のQ&Aは「食費は利用者と施設の契約で、朝食、昼食、夕食と設定することも可能である。特にショートステイについては、入所の期間も短いことから、一食毎に分けて設定することが望ましい」と記載。しかし自治体行政および施設に改善要請しても『望ましい』では強く指導できない、施設も自由契約だからと消極的でした。提供されてもいい食費を一日毎として徴収することはおかしなことです。

12年介護保険改定において、厚労省のQ&Aは「食費は原則として一食毎に分けて設定」と明記し「消費者契約法では、消費者に一方的に不利益な契約条項は無効にできる。その考えを踏まえた」とコメントしています。

今回の厚労省の「一食毎」の明記により、地方自治体と施設は改善せざるを得なくなりましたが、進捗を早め、実行を進めるためには利用者と家族および市民が声をあげ、改善を求めていくべきです。

心遣いが嬉しくて

長野県・Kさん 72歳

介護をするようになって9年目になります。これがいつまで続くのかしらと思うと気持ちが暗くなりますが、先日、デイサービスの職員の人に私のことを「風邪気味だったようですが、大丈夫ですか」と声をかけられ、いっどんに元気になりました。

お待ちしています！

■「ぼ～れぼ～れ」へのご意見やお便りは「家族の会」編集委員会宛にお送りください。
〒602-8143 京都市上京区堀川通丸太町下ル京都社会福祉会館内
FAX.075-811-8188 Eメール office@alzheimer.or.jp

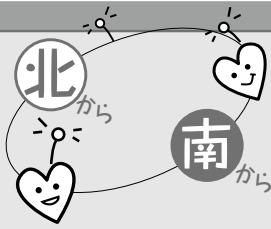
112 支部だよりにみる

介護体験

今回は
長野県

「介護する家族の気持ち」

長野県支部 坂口みさ子

長野県支部版
(2012年8月号)

●追い込まれる手探りの介護

私は、母を看ています。母は、70代後半に入る頃より私に対してドロボー呼ばわりするようになってきました。その頃はまだ介護保険制度や、認知症といった言葉すらなく、（知らなかった？）どこに相談に行けばよいのかもわからなかったため、私はずいぶん精神的にも追い込まれました。

母は、昭和59年秋、交通事故で頭を打ち3ヶ月間、北信病院の脳外科に入院したことがあります。今でこそ、高次脳機能障害や認知症など、いろいろ勉強して少しずつわかるようになりましたが、それまでは何もわからず、つらい思いをしました。

●母の叫び～命の保障をしてくれ～

その母も今年4月で88歳になります。現在の要介護度は3です。8年以上介護をしてきました。

高熱を出した時、母は気弱になっていたのか、いつものようにキッとしたきつい目つきをしたまま、私に「命の保障をして！」と叫びました。何回も何回も叫び、私に向かってきました。その母を見て、いつも攻撃てくる母の真の感情や死というものを、とても意識しているように私は感じました。全戸配布の告別式のお知らせの紙を見るのも、何年か前からとても嫌がるようになりました。

●認知症に理解のない周囲に苦しみ

～区長にも叱られて～

今は、足腰もずいぶん弱り、敷地内から出ないどころか外にも出なくなってしまいました。しかし何年か前までは、たとえ夜中でも日中でも時間に関係なく、家の東側の側溝に流れている水をヒャクで汲んでは、道路等に撒いていました。昼間はもちろん夜中もですから大変です。何度いろいろな苦情を言われたことでしょう。

そんな母を何とかしてほしいと、区長さんから電話でお叱りを受けたこともありました。「どうにかできるものなら、どうにかしていますが、どうにもできないのが現状です」と区長さんに申し上げると、区長さんは「私の声は区民の声だ」と繰り返すばかりでした。

ある程度のことは、区長さんなり、民生委員の方たちに知ってほしいと心から思った時でした。介護経験のある方と、ない方との温度差をすごく感じた区長さんの電話でした。

現在はリハビリパンツの中の排便などの格闘の日々です。



「かもしれない」



毎日新聞記者
夫 彰子 (ぶ ちゃんじや)



まだ前任地の福岡市にいた今年3月のこと。1972年春に福岡が政令指定都市になり丸40年の節目を迎えるということで、同僚幾人かとともに、市内7つの行政区ごとに今昔を紹介する連載企画に加わった。

私が担当したのは南区。区内には指定都市移行の時期に完成し、今も1,300世帯以上が暮らす団地がちょうどあり、記事の舞台に打って付けと、早速取材を始めた。

Kさん（男性）は当時80歳。17年もの間、団地の自治会長を務めてきた。戦後、身入りが良いからと福岡県内の米軍基地で働き、親兄弟を養ったとか。妻と長男の3人で八畳一間の借家から3LDKの団地に入居した時は、「御殿かと思った」とカラカラ笑った。

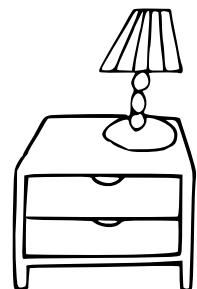
明朗快活な人柄だが、自治会長としての活動ぶりについて語る時は、少し元気がなかった。入居者の大半は高齢化し、自治会長職の後任も見付からない。そして、団地内で起きた3件の自殺と4件の孤独・孤立死。Kさんは懐中電灯片手に、盆正月も夜の見回りを欠かさない。それでも防げなかった入居仲間の哀しい最期を思ってか、話しながら何度もため息が漏れた。

今年は特に「孤立死」のニュースが多いと感じるのは気のせいだろうか。1月に札幌市で知的障害の妹と姉、2月に東京・立川市で母と知的障害の息子、3月に再び立川市で95歳の母と63歳の娘……。パソコンで自社

の記事検索画面に「孤立死」と入力すると、驚くほどの件数が引っかかる。一つ一つのニュースに目を通すと、当事者のほとんどが高齢者や障害者だ。

先日、ある機会に「メディアはやけに孤立死を取り上げるが、孤立死だから不幸とは限らない」という意見を読んだ。幸不幸の感じ方は主観的なもので、確かに一理あるだろう。けれど、孤立死に至ったのは、高齢者や障害児者と彼らの介護者だけで細々と暮らしていた家族だったと知る時、死因が衰弱死や凍死だったと聞く時、「彼らが幸せな最期だった可能性もある」とは、私には思えない。

彼らは社会が差し伸べる手を最も必要としていた人たちかもしれない。でも助けてほしいと言えなかった、言う術を知らなかったのかもしれない。或いは、言ったのに私たちがその声を聞こうとしなかったのかもしれない……。孤立死のニュースに接するたび、「かもしれない」が次々と浮かび、最後は決まって思う。「自分の身近に今、彼らのような人がいるのかもしれない」と。



いきいき 「家族の会」まちでも村でも

ちらし・FAX作戦 !! 大成功

佐賀県
支部

「8月19日、杉山孝博Dr.研修講座が開催され、会員はじめ介護・看護関係者、医療専門職の方々、約200名が熱心に受講し、講座後も30分以上にわたり活発な質疑応答が続き大成功」と、支部会報が伝えてあります。

支部代表の森久美子さんによると、当初、参加希望者が少なく世話人で「チラシ配り・FAX作戦」を行い、参加呼びかけを行った結果が200という数字になったとのことです。「もう人集めはこりごり」と言いながら、「次の計画は?」と言いたずねた世話人さんもあり、前へ！前へ！と士気の高い賑やかな反省会の雰囲気が伝わってきました。

支え合う仲間の交流会

栃木県
支部

7月に日光市家族の会と茂木町「すまいる会」が、初めての試みとして茂木町保健福祉センターで交流会を行い、参加者26名が日頃の介護の悩みを「本音」で語り合いました。

支部世話人でもある「すまいる会」会長の中野さんは、「離れた場所に住んでいても同じ思いを持ち、共に支え合う仲間がいることを知り心強く感じました。今回の縁を大切に今後も交流を深めたい」と話し、支部会報の中で編集者は「地域の家族の会どうしの交流を共に手を取りお手伝いをします」と力強く語っています。

もう一泊！ もっと語り合いたい

茨城県
支部

7月7～8日に実施された北茨城市方面1泊2日のリフレッシュ旅行は、参加者21名で五浦海岸の景観を楽しみ、宿舎では研修会後の懇親会・カラオケ大会等々で盛りあがりました。

ご主人の介護を「この日だけは」と、ご長男に託して参加されたM・Cさんは「同室の方と明け方まで話しましたが、いくら話しても尽きることはなかったです。思いきって参加し、もう少し頑張ってみようと思うことができました。旅行にお誘いくださいました事務局の皆様に感謝！」と、語っておられます。

七夕飾り !! ありがとう

宮城県
支部

8月6～7日は「仙台七夕まつり」。吹き流しや巾着の七夕必需品に加えて北陸ブロック

会議参加者からの短冊「被災地への励ましメッセージ」が支部事務所のある県社会福祉会館玄関に飾られ、賑やかさを演出しました。



国際交流委員会発 カナダの巻 「ケアでつながる地球家族」

■国際会議はより良いものを構築するための情報交換の場

カナダのバンクーバーで、7月15日から5日間開催された、The Alzheimer's Association International Conference (AAIC) 2012に参加し、発表してきました。



1日早く到着し、憧れの冬期オリンピックの開催されたウィスラー山頂にて。

この国際会議が、「家族の会」が加入しているADIの国際会議 International Conference of ADI (ICADI)と異なる点は、基礎的研究、臨床的医療的研究が中心の会

議です。しかし、ICADIにおいては、看護、ケア、患者さんの家族、患者さん自身に加えて、医師中心の基礎・医療研究も増えているように感じます。

AAICにおいても、同様に、基礎・臨床研究から、看護、福祉の研究が少しずつ増えているように感じています。お互いが、知り合える場も増えているのです。

さらに、最近の傾向としては、韓国、中国の演題数が飛躍的に増加している点は特筆すべきことです。やはり、経済と密接に関係していると感じます。

いつも、解らないこと、知らないことを考え、探求し、より良いものを構築するために発表し、情報交換をする場が私たちには必要です。新しい、診断方法タウ・イメージング、治療セクレターゼ阻害剤、βアミロイド抗体などの開発発表がありました。

(国際交流専門委員 片山禎夫)



仲間と出会い 話したい

今月の本人 中村成信さん（神奈川県）前編

中村成信さん（62歳）は神奈川県茅ヶ崎海岸を「サザンビーチちがさき」と命名し茅ヶ崎の繁栄に貢献した元公務員です。6年前に万引きで逮捕され懲戒免職となりました。日頃の行動からは考えられない行為に家族が受診を勧めピック病の診断を受け、公平委員会で免職処分は撤回されました。

現在は本を出版し、「今はまだしゃべるので、認知症の当事者の声を聞いてほしい。伝えたい」と講演活動もしています。日々はデイサービスで営繕的な業務を任せられています。中村さんが東京で話されることを聞き、行つてきました。

（編集委員長 鎌田松代）

自分の性格がわからなくなりますが、変わっていないと思っています

● 受診

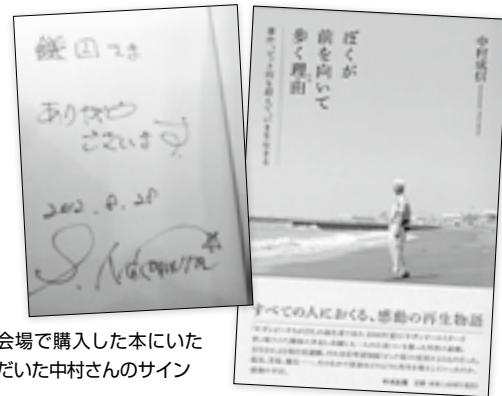
家族は、なぜこんなことを……心の病ではないか、と思っており、認知症とは思っていませんでした。私は、受診は嫌でしたし自分では病気ではないと思っていた。北里病院に検査で何回か通い、医師はいきなり病名を告げました。「中村さん、認知症よ。5年～10年後は今の中村さんでなくなるよ。今のうちにやれることをやっておくように……」と説明を受け、憤りを感じました。自分が認知症とは思わなかっただし、なんで俺がっ……の気持ちもありました。処方されたアリセプトはごみ箱に捨てました。

● 本当と夢がごっちゃに……

自分でできていると思っているのに、家内は「できない」といい、ぶつかります。記憶が本当のものと、夢のところとがごっちゃになっているようです。昔に行ったヨーロッパはつい最近に行ったように思っています。自分がわからなくなりますが、本人にとっては愉快な感じではなく、思いを否定されたように思えます。

● ダムの決壊のように怒りにのみ込まれて…

どうしてなのかはわからないのですが、怒りにの



会場で購入した本にいた
だいたい中村さんのサイン

本の表紙タイトル：「ぼくが前を向いて歩く理由 (わけ)
～事件、ピック病を超えて、いまを生きる」
著者：中村成信 発行：中央法規出版 定価1,600円+税

み込まれスイッチが入ります。空気清浄機を家内に投げつけようとしたこともあります。他の人にとっては何でもないことなのですが。

● トイレットペーパーや靴、ネクタイが納戸にたくさん……

なぜ、同じものがたくさんあるのかわからないのですが、どうしてもトイレットペーパーを買わないといけないと思ってしまいます。しかし家に帰るとまた買ってきてしまったと思い、隠していました。今は一人での買い物は止められています。家族と一緒に行っています。

（書き書き 鎌田松代）

⇒次月は「仕事ができないつらさ」など仕事についてのお話です。

情報 交流の場

宮城●11月1日・15日(木)午前10:30～午後3:00／翼（本人・若年）のつどい→将監市民センター
神奈川●11月18日(日)午前11:00～午後3:00／若年期認知症本人・家族のつどい→ほっとぽっぽ
富山●11月24日(土)午後1:00～3:30／てるてるぼうずの会→サンフォルテ2階介護実習室

静岡●11月17日(土)午後1:30～3:30／若年のつどい→富士市フランセ東館3階福祉団体活動室→支部に要申込
愛知●11月10日(土)午後1:30～4:00／元気かい→東海市あしあわせ村
滋賀●11月14日(水)午前10:00～午後2:00／ピアカウンセリング→滋賀県成人病センター職員会館2階
鳥取●11月25日(日)午前11:00～午後3:00／若年のつどい「にっこりの会」→地域交流センター笑い庵「笑い庵カフェ＆マルシェ」(米子市)
広島●11月3日(土祝)午前11:00～午後

3:30／陽溜まりの会東部→福山すこやかセンター
11月10日(土)午前11:00～午後3:00／陽溜まりの会広島→広島市吉島地域福祉センター
11月24日(土)午前11:00～午後3:30／陽溜まりの会西部→廿日市市あいプラザ
宮崎●11月12日(月)午前11:00～午後2:00／本人交流会「今日も語ろう会」→宮崎県支部事務所

詳細は各支部まで



一景送信))

東京での会議の前に少し時間があったので、スカイツリーの下までだけ行ってきました。（9月26日。東京メトロ押上駅下車、東京ソラマチ。左はイーストタワー）



会員のみなさんお元気ですか。

9月に京都で開催した世界アルツハイマー記念講演会のテーマは、「認知症ケア」と「家族支援」を考えるでした。この二つは「家族の会」が数年前からその内容について考えようと提起しているテーマです。

「認知症ケアの充実が必要」とはよく言われるのですが、じゃあ認知症ケアとは何？と問うと、人によって答えはまちまち。医療技術上、介護技術上の本人への関わり方を思う人もいれば、介護保険など制度の中での認知症の扱い方のように思う人もいます。「家族の会」は、「本人への適切な対応とともに、本人と家族がともに安心して暮らせる社会的な対策が取られること」（2011年度総会決定）と定義していますが、これでは少し抽象的。もっと具体的に誰もが納得できる言葉で定義したいと考えてきたのです。

一方、「家族支援」は文字通り家族を支援することですから、意味を巡っての曖昧さはありません。こちらは、ではどんな支援が必要かという問題です。「家族の会」が32年前に結成されたのは、家族支援を求めてでした。つまり、介護があまりにも苦しいから家族を支援してほしい。そのために「本人」を預かってほしい、あるいは家に助けに来てほしい、というものでした。この段階ではデイサービスもヘルパーも、

家族の支援のためでした。その後、「本人」が楽しく

生きるためのデイサービス、「本人」が豊かに暮らすためのヘルパーへと変化してきました。介護保険は「本人」を支える制度として誕生しました。こうして、「家族支援」のために始まった「本人」への対策は、独自の「本人支援」へと発展したのです。

当初は、本人支援が充実すれば家族の苦しみはすべて解消されると考えていましたが、そうではありませんでした。たしかに、「外出できない」や「自分の時間が持てない」などのつらさは軽減しましたが、「気が休まらない」つらさは変わっていません。「家族の会」の調査でそのことが明らかになりました。このことから私たちは、「どれだけ本人支援が充実しても家族に対する固有の支援が必要」と考えるに至ったのです。そして、今日の状況での「固有の支援」とは何か？その内容を明らかにしなければならないと考えているのです。

このような歴史の流れの中での、講演会でした。京大附属病院老年内科の武地一医師の講演は、「京都式“認知症ケアの定義十箇条”」から始まりました。一筆啓上では初めて、「次回に続く」とさせてもらいます。この続きは来月に…。

それでは、また来月まで、頑張ってください。

2012.9

理事&本部事務局活動・業務日誌

●理事・本部活動●

4日★警察庁運転免許制度改正ヒアリング
高見⑩、荒牧⑨、徳廣京都府支部副代表、小川⑪／6日★常任理事会／9日★世界アルツハイマー記念講演会京都会場／15日★KBSラジオ「ぱんざい人間」出演 高見⑩／世界アルツハイマー全国一斉街頭行動／18日★サービス付き高齢者向け住宅見学（大阪）高見⑩、荒牧⑨、京都府支部世話人、小川⑪／19日★会報編集会議／21日★電話相談員月例会／29日★世界アルツハイマー記念講演会東京会場

●事務局業務●

12日～14日★内閣府立入検査（12日のみ滋賀）／20日★支部代表者会議会場等下見（兵庫）小野、櫻井⑪
文書等発受
5日連絡 支部 「事務連絡」⑩／11日後援承諾
「第二の認知症」を知っていますか？レビューカード型認知症を知ろう、学ぼう、広めよう（日

本認知症コミュニケーション協議会）⑩／12日連絡 支部 「2012年度支部代表者会議の開催と全研の申し込みについて」「事務連絡」⑩／13日会報 支部 会員 ば～れば～れ386号 協力：京都府支部⑩／19日連絡 支部 「事務連絡」⑩／26日連絡 支部 「支部会計担当者会議の開催について」「2013年度杉山孝博Dr.の3講座の開催について」「事務連絡」⑩

●会員数（個人・団体）10,234名・団体（9月15日現在）
●ホームページ総訪問者数のべ37,251件（8月1日～31日）
●本誌発行部数25,000部

事務局 ほっと コーナー

9月は「家族の会」の活動の中でも特に活発な時期です。世界アルツハイマーの統一行動として、街頭や各地の催しなどで啓発リーフレット（会報8月号に同封）を配布したり、講演会を開催して認知症を正しく理解してもらうための活動を全支部で行っているからです。

今年は、各製薬会社から啓発グッズ（幟やTシャツ、DVDなど）を作成していただきました。今月号の4～5ページに掲載していますが、世界アルツハイマー月間の幟を掲げ、認知症サポートカラーのオレンジ色のTシャツを着た姿はとてもインパクトがあります。今年の統一行動日は9月15日で、この日に全国の支部で同じ服を着て同じ活動をしていると思うと、「家族の会」として心がひとつになった気がするのです。（事務局 辻村康代）